〔駒沢女子短期大学　研究紀要　第41号　P.1～11　2008〕

小学校英語指導者のためのPhonemic Awareness育成を目指す音声教材開発

―小・中連携を視野に入れた文字指導との融合を目指して―

金　澤　延　美　　伊　東　弥　香
（東海大学）

Development of Phonemic Awareness-focused Teaching Materials for Elementary School English in Japan

Nobumi KANAZAWA　　Mika ITO
(Tokai University)

現在、小学校英語活動の90％以上は「学級担任」が行っている。しかし、平成17～18年度に筆者らが実施した２つのアンケート調査結果から、小学校教員の「英語力」に対する不安感と、音声中心の自己研修教材の必要性が明らかになっている。５、６年生を対象とした小学校英語の必修化への動きも踏まえると、小学校教員の英語力向上の一助となるような、使いやすい教材の提供が不可欠である。本論では、忙しい教員達が空き時間を利用できる自己研修用音声教材の開発が今後の指導体制確立に有用と考え、文字活動への橋渡しとしての「音素への気づき（phonemic awareness)」育成のための教材開発研究について、小・中連携の視点から報告する。

キーワード：phonemic awareness、小学校英語、教材開発

１．はじめに

筆者らは、小学校での英語教育の必修化・教科化を視野に入れ、一貫性英語教育を目指すことを前提に小学校英語カリキュラム開発のための研究を進めているが、指導内容・方法を検討するためには、子どもの興味・意欲・態度（Basic Interpersonal Communication Skills；BICS）および言語能力（Cognitive Academic Language Skills；CALP）の育成のための長期的な展望が不可欠であると感じている。2004年度から、米国、英国、韓国、台湾の英語プログラムの視察調査を行った結果、「文字から音声へ」ではなく、小学校の段階で英語の音に慣れ親しませて、「音声から文字へ」の順序で指導することにより、音声指導に段階的・発展的な要素を取り入れることが重要であるという見解に至った。とくに、日本語とは異なる英語特有の「音（音素)」さらに、「音声変化」「プロソディ」を理解できるように、「phonemic awareness（音素への気づき）育成」を行うことが、小学校英語と中学校英語の「連携」の鍵だと考えている（金澤・伊東、2007)。現行の小学校英語活動で多く見られる音声のみの指導では小・中の連携は難しい。

２．研究の目的と背景

本研究は、日本の小学校の実情を考慮した上で、小学校英語を指導する教員がアルファベットの音を楽しみながら学べるような音声教材を開発することである。筆者らが行なった現職小学校教員を対象とした意識調査（伊東・金澤、2006；2007）の結果を踏まえ、ローマ字ではなく、英語としてのアルファ

ベットの音への気づき—phonemic awareness—を育成し、音と文字の関連性を学ぶ重要性を伝えることを目的とする。

2.1. 小学校英語：指導内容

2002年4月から「総合的な学習の時間」の中で「国際理解の一環としての外国語（英）会話」が始まったが、現段階における「英語活動」は学校裁量のもと行なわれているため、その取り組みは決して一様ではない。また、小学校における英語教育の目的・目標、指導内容・方法は明文化されていないというのが実情である。指導内容については、文部科学省による英語活動の指導の基本は、音声中心となっており（文部科学省、2001）、多くの学校では歌やゲーム中心の音声重視の活動が行われている。しかし、小学校の中・高学年、あるいは全学年に対して、同じ指導内容であることに対する懸念の声も挙がっている。また、子どもたちは文字活動の経験なしに中学校で「聞く」「話す」「読む」「書く」という4技能の育成を一気に目指すことになるが、現行の中学校の英語授業ではアルファベットの音と文字の関係をしっかりと学ぶ機会は極めて少ない。このことは小学校での英語活動と中学校英語の指導内容に整合性がないことを示唆している。

小学校段階で英語活動を導入する意義を最大限に具現化し、小・中連携をスムーズに行うためには、小学校での音声活動を土台にした文字指導、とくに音声と文字をつなぐための言語活動や言語材料の検討が不可欠と言える。なぜなら、最長6年間という長い活動期間では、児童の年齢に呼応させ、単語や文レベルに発展させるようなスパイラルな指導内容と方法によって、英語の習得と定着を目指すことが重要だからである。

2.2. 小学校英語：教員の「英語教授力」

小学校英語は教科として位置づけされていないため、中央行政による指導者養成は行なわれていない。このため現行の英語活動では小学校教員が指導の中心となっている。文部科学省の小学校英語活動の実施状況調査結果（平成17年度）によると、英語活動の90%以上（第2学年94.7%、第6学年92.6%）は学級担任（Homeroom Teacher、以下HRT）によって行われていることがわかる。また、全国の公立小学校の教員（教務主任3,503名）を対象とした実態および意識調査（Benesse教育開発センター、2007）では、ほとんどの公立小学校で何らかの形で英語教育が行なわれており（第1～2学年で8割、第3～6学年で9割以上）、実施校ではHRTと外国語指導助手（ALT、AETなど、以下ALT）が指導に当たっていることが明らかになっている。

これらの調査報告が示すように、小学校英語の指導者として小学校教員の果たす役割は大きく、大学の教員養成（教職）課程で小学校英語に関する教育を受けていないHRTが中心となって英語活動を行なうためには、「英語教授力（英語力と授業力）」が課題となっている。筆者らは、現職小学校教員対象に、「小学校英語の指導者に求められる資質」と「必要とされる研修」に関する意識調査を行い（伊東・金澤、2007）、（以下予備調査）、定期的な「英語活動」導入を目前にした公立小学校の教員達（200名）が小学校英語について具体的なイメージがなく、指導者研修、およびアルファベットの教え方の点において消極的であるという調査結果を得た。

さらに予備調査の結果を踏まえ、英語活動の実施経験の違いによる意識の差の有無を検討するために、新たに現職の公立小学校教員を対象とした意識調査（金澤・伊東、2008）、（以下本調査）を実施した（注1）。本調査では600名からの回答を得たが、英語活動を指導した経験のある教員にとっては、「英語活動の指導者」と「他教科の指導者」の区別はなく、「教員としての質と能力」が重要であると感じていることが示唆された。このことは、英語の専科教員のいない状況においても、小学校教員が英語活動の指導者として充分に活躍できる可能性があることを意味している。しかし、同時に、経験者が抱く「英語力への不安感」や、「ゲームなどの指導技術・方法」「英語力の向上」のための現職教員研修の必要性が浮き彫りになった。現実的には、全国40万人を超える小学校教員を対象とした勤務時間外での研修を行うことは非常に困難であるため、教員達が勤務時間内・外の空き時間を利用できるようなCDやビデオなどの音声視聴覚教材を開発することが今後の小学校英語の指導体制の確立にとって有用であると思われる。

3．Phonemic Awareness と Phonics

小・中連携を視野に入れた音声指導の鍵となるのが phonemic awareness である。phonemic awareness とは「どのように言語が働くかについての知識（the knowledge of how language works)」(Fitzpatrick、1997：4）のことである。アルファベット言語（an alphabetic language）を理解するためには、文字と文字パタン（the letters and letter patterns）が単語を構成する音の組み合せ（the sub-sounds of words）を表していることを知る必要があり、子どもたちは「書き言葉（written language)」の前に、「話し言葉（spoken language)」を理解しなければならない。

「音素システム（The phonemic system)」とは、文字と文字の組み合わせによって表される「音声のシステム（a system of sounds)」のことである。まず音素を学び、その音素を表すのに用いられる文字を学ぶという手順こそが、アルファベット・コードを習得するための論理的アプローチであると考えられる。音素システムの根幹をなす、4つの原則は以下のとおりである。

(1) Sounds/phonemes are represented by letters.
音声あるいは音素は、文字によって表される。

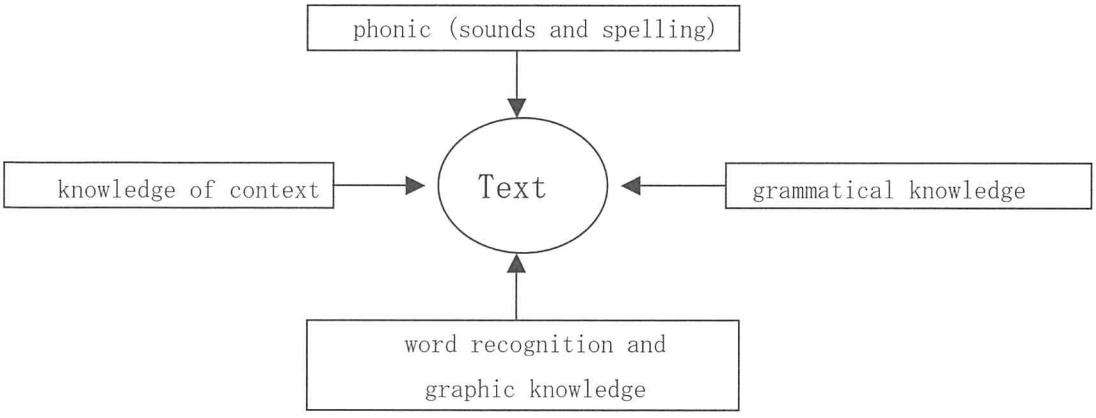
(2) A phoneme can be represented by one or more letters.
1つの音素は、1つの文字、あるいは1つ以上の文字によって表される。アルファベット・コードでは、1音、1文字対応になっていないため、sh、th、ee のように、2文字で1音を表す場合もある。

(3) The same phoneme can be represented/spelled in more than one way.
同じ音素でも、1つ以上の表し方、あるいは綴り方がある。これは母音において顕著であり、例えば、rain、may、lake などがある。

(4) The same spelling may represent more than one sound.
同じ綴りでも、1つ以上の音を表すことがある。例えば、mean と deaf、crown と flown、field と tried など。

米国では、phonics（フォニックス）への発展を踏まえた phonemic awareness 育成が行なわれている。phonics とは、アルファベットの音と文字を関連づける指導法である。リーディング指導のためにアメリカで開発され、通常、幼稚園、あるいは小学校1年生から学習する。英語のアルファベットは音と文字が1対1に対応していないため、26文字の組み合わせを知らなければ、例え英語の母語話者であっても、単語、文レベルへと進むにつれて英語学習に困難が増すという問題の解決において phonics は重要な役割を果たしている。

筆者らは、米国（2004年夏）と英国（2005年夏）への視察調査を行なったが（注3）、米国と同様に、英国の英語プログラムにおいても、phonics 指導およびスペリング指導を踏まえた phonemic aware-



(Department for Education and Employment, 1998: 4)

図1．The reading searchlights model（The NLS）（注2）

ness 育成が行なわれていることが明らかになった。

英国においても、ただ単純に本に触れるだけでは単語の異なる音（the different sounds of words）を習得できないため、児童に対して、「単語レベルのストラテジー（word level strategies）」を適切に指導する必要性が指摘されている。また、リーディング能力の習得については、児童は出来るだけ多くのストラテジーを使うべきであるとし、ストラテジーの多用を提唱するために、テキストを照らす4本のサーチライト（searchlight）に例えた“The reading searchlights model”を提唱している（図1）。

英国の The NLS は、長年にわたる国内外の調査や、小学校における実践報告からの示唆などを反映し、それらを授業に活かすことを目的として作成されたものであるが、教育労働省（Department for Education and Employment）は、過去の研究結果から主に次のような点においてフォニックス指導法の有効性を述べている（Department for Education and Employment、2000：3）。

(1) 最も有効な phonics 指導法においては、最初に、子どもは話し言葉の中の音素を識別し、次にこれらの音素がどうように文字や文字の組み合わせ（graphemes： 書記素－綴り字の体系における最小単位）によって表されるのかを理解する。

(2) 「文字と音の対応に関する知識（knowledge of the letter-sound correspondences）」とともに、「音素を分解・ブレンドする力（phonemic awareness）」は、リーディングとスペリングにおける成功のために最も重要な鍵となる。体系的な指導を受けた児童・生徒の多くは、リーディング能力とスペリング能力を測るテストで良い成績を収めている。

(3) phonics は、適切かつ子どもを動機づけるような方法で教えることが可能であり、子どもは楽しく、効果的な活動を通じて phonics を学ぶことが出来る。

(4) 子どもは早くから、例えば1年生（Year 1）の終了までに、時間をかけずに phonics を学ぶことが出来る。このことは、早い時期からのリーディングやライティングへの自信を促すという利点を生むことになる。

4．Phonemic Awareness 育成のため音声教材の開発

小学校英語活動は2002年度から学校裁量で行なわれているが、中央教育審議会・外国語専門部会が小学校英語の必修化・教科化に関するまとめを発表し（2006年3月）、近い将来、全国の小学生（第5学年、第6学年）が一律に英語を学ぶ可能性が出ているが、そのような変化を見据え、中学校での英語学習（4技能の育成）の土台作りの一助となるような音声教材開発が必要である。それはまた同時に、小学校教員が抱く「英語力への不安感」を軽減し、「ゲームなどの指導技術・方法」や「英語力の向上」に役立つ、使いやすいものでなければならない。筆者らは、前述の予備調査および本調査の結果を踏まえ、phonemic awareness 育成のための小学校教員の自己研修用CD教材の開発に取り組んでいる。phonemic awareness の育成は、リーディング能力育成に最も大きな影響を持つと考えられているので、音声指導に段階的・発展的な要素を取り入れて、「音声から文字へ」の順序で指導するという長期的展望のもと、小学校英語を考えることが可能となる。

以下に、CD教材開発のための基本指導理念、日本人のための phonemic awareness、CD教材案を紹介する。

4.1. 基本指導理念

4.1.1. アルファベットの文字

アルファベット文字の指導内容の最も基本となるのが、26文字の「名前」（A～Z/a～z）である。大文字と小文字それぞれを「識別する」「音読する」「書く」という活動が文字導入の第一歩となる。ローマ字として学んだアルファベット26文字の「名前」を英語として学習する。アルファベットの歌や、絵を利用して楽しく文字を導入する。

4.1.2. アルファベットの音（phonemic awareness）

アルファベットの「名前」には「音」があることに気づかせる―①個々の音を認識、識別する、②個々の音を声に出す、③音声と文字を関連づける。phonemic awareness 育成のための言語活動では、発話される単語（spoken words）が小さな音のつながり（chains of smaller sounds）、つまり音節と

音素（the syllables and phonemes）のつながりであることに気づかせる。単語の構造を分析・理解・解釈すること（decoding）によって、単語の綴りに関する創造力・類推力（inventive spelling）が容易に身につくようになる（Adams et al.、2002、ほか）。

Phonemic awareness には、英語特有の音（sound）、リズム（rhythm）、イントネーション（intonation）を学ぶことができるような、歌（song）、チャンツ（chant）、ライム（rhyme）、早口言葉（tongue twister）が有用である。また、英語圏では、母音（vowel）とその母音から始まる単語の絵カードやチャンツなどを使って、アルファベットの「名前」には 異なる「音」があることを学ぶためのアクティビティが一般的である。例えば、絵カードを使って歌いながら（例：A has two sounds, A has two sounds, /ei/and/æ/, /ei/and/æ/, /ei/is for apron, /æ/is for apple, /ei/and/æ/, /ei/and/æ/.）、アルファベットの名前と音を学ぶなどの方法がある。しかし、日本人にとっては母音からの導入は難しい場合があるので、子音（consonant）から phonemic awareness を始めてみるのも良い。

4.2. 日本人のための phonemic awareness

4.2.1. モーラ型言語

言語は、そのリズムの特性によって、強勢型言語（stressed-timed language）、音節型言語（syllable-timed language）、モーラ型言語（mora-timed language）の 3 つに分類される（小池、2003：477）（注 3）。日本人にとって英語の発音が難しい大きな理由の 1 つは、英語が強勢型であるのに対し、日本語がモーラ型であることによる。

英語は、強勢（stress）の置かれる音節を等時性（isochronism、isochrony）を持って発話しようとするために、この強弱の変化が英語独特のリズムを生む。一方、日本語は、モーラが等時性を持ってほぼ等しい間隔で現れる。つまり、日本語を仮名書きにしたときにすべての仮名（「ゃ」「ょ」などを除く）の発音は同じ長さになるのである（この 1 つの単位がモーラ）。例えば、英語で sausage は sau・sage の 2 音節であるが、日本語の「ソーセージ」は、「ソ」「ー」「セ」「ー」「ジ」の 5 モーラになる。

4.2.2. phonemic awareness 育成のねらい

今回の CD 教材開発においては、日本人の苦手な音を念頭に置き、以下のようなねらいのもと、英語の歌やチャンツを使いながら phonemic awareness を育成する。

(1) 「聞く力」

①英語の強弱を感じる、②有声音と無声音の違いを知る、③唇を閉じてから破裂させる音（閉止音）を学ぶ、④日本語にも近い音があるが発音の方法が違う音があることを理解する、⑤音で印象が異なることを知る。

(2) 「話す力」

①英語の強弱を発音する、②有声音と無声音を発音する、③唇を閉じてから破裂させる音（閉止音）を発音する、④日本語にも近い音があるが発音の方法が違う英語の音を発音する、⑤音で印象が異なることを体感する。

(3) 「音」への気づき

① 音の分離（sound isolation）

● 音を分ける

● 初頭音（initial sound）を聞く

（例）Ssssssssun begins with /sss/ the first sound in sun, /sss/.

● 最後の音（ending sound）を聞く

（例）Ssssssssunnn ends with /nnn/ the last sound in sun, /nnn/.

● 初頭音や最後の音を聞き分ける（慣れてきたら文字カードを利用する）

② 音の結合（blending）

● 音を引き延ばして結合を理解する

（例）/sss/-/uuu/-/nnn/、what's the word? Sun.

● 発音された単語を理解し、絵を選ぶ

（例）太陽の絵を見て、指導者が発音した初頭音、パペットが発音した単語の最後の部分を聞き、単語を発音する

Teacher：/s/

Puppet：/un/

Teacher：What's the word?

Children：Sun.

● 音の結合だけで理解する

（例）/s/-/u/-/n/. What's the word？ Sun.

③ 単語の分割（segmenting）

●単語を分割する

(例) The sounds in sun are /sss/-/uuu/-/nnn/. Let's say the sounds in sun together.

(例) 単語の最後の部分を聴き、リピートする

Teacher：sun　　Children：un

(例) 分割して発音された単語を、文字カードで並べる

/s//u//n/ → [s] [u] [n]

4.2.3. phonemic awareness 育成のための作品とアルファベットの音

次に筆者らがCD教材用として検討している作品と、それぞれで学ぶアルファベットの音を紹介する。一般に、外国語を学ぶときは学習者の母語との類似性が大きな影響を持つと考えられるが、日本人は母音をきっかけに音を認識する傾向にあるので、英語の子音の区別がとくに難しい。しかし一方で、子音は唇の形や舌の位置、発音の方法が母音よりも分かりやすいので、子音を認識し、はっきり発音できると英語らしくなる（伊東、2005：85)。今回のCD製作にあたっては、先にも述べたが、日本人のためのphonemic awareness育成という点から、子音を中心に学べるような選曲を考えている。

1．Ten Fat Sausages (chant) <b/ /p/>

●日本語に近い音はあるが、もっと強い破裂音を聞き分け、発音する

●手拍子などを用いて英語のリズムの取り方の違いを理解し、発音する

●音の分離（初頭音を聞き分け、発音する）を理解する

●振り付けをしながら、単語を発音し、歌う

●２枚の文字カード [p] [b] を見せながら、初頭音を発音する

2．Teddy Bear (chant) <t/>

●日本語に近い音はあるが、もっと強い破裂音（無声音）を聞き分け、発音する

●手拍子などを用いて英語のリズムの取り方の違いを理解し、発音する

●英語独特のリズムを感じる

●音の分離を理解する（Te-ddy)

●振り付けをしながら、単語を発音し、歌う

●初頭音が /t/ の単語発音する時、[t] の文字カードを見る

3．Hickory Dickory Dock (song) <d/>

●日本語に近い音はあるが、もっと強い破裂音（有声音）を聞き分け、発音する

●振り付けをしながら、単語を発音し、歌う

●/d/の音を聞き取り、手をたたきながら、歌う

●初頭音が /d/ の単語を発音する時、[d] の文字カードを見る

●音の結合を理解する（/d/ /o/ /ck/. What's the word? Dock.)

4．Sally Go Round the Sun (song) <s/ /z/ /n/>

●日本語に近い音はあるが、もっと強い摩擦音を聞き分け、発音する

●音で印象が異なることを実感する（/s/の初頭音を/z/に替えて歌う）

●単語の最期の音を聴き取り、発音する (/s//u//n/、/m//oo//n/)

●音の結合を理解する（アルファベットの文字カードを使って、既習単語を完成させる）

5．Two Little Blackbirds (chant、rhyme) <j+ack/>

●人名を使って単語の分割を理解する (Jack →/j/+/ack/)

●Ｊの音抜き歌を歌い、単語の分割を理解する

●Jack と Jill の単語カードを見て、それぞれの発音をする

6．Rain Rain Go Away (rhyme) <rhyming>

●韻を踏んだ単語を聞き分ける

●共通している音を聞き分け、発音する

7．Mary Had A Little Lamb (song) <l/>

●日本語に近い音はあるが、英語音を聞き分け、発音する

●初頭音が /l/ の単語の発音する時、[l] の文字カードを見る

●音の結合を理解する（/l/ /æ/ /m/. What's the word? Lamb.）音の結合を理解する（アルファベットの文字カードを並べて、wh が初頭音の単語を完成させる）

8．Five Little Fishies (rhyme、chant) <f/ /v/、rhyming>

●日本語にない音を聞き分け、摩擦音（無声音）を発音する

●単語の分割を理解する（The sounds in five

are /fff/-/aaaiii/-/vvv/.)

- 音の結合を理解する（アルファベットの文字カードを並べて、/f/が初頭音の単語を完成させる）

9．Wheels On the Bus（song）</wh/>

- 日本語にない音を聞き分け、摩擦音（有声音）を発音する
- 単語を分割する（Dri・ver. What's the word? Driver.）

10．Row Row Row Your Boat（song）</r/>

- 日本語にない音を聞き分け、発音する
- 音の分離を理解する（me-rri-ly）
- グループに分かれて輪唱することで、自分の発音に集中する

11．Hillary Hume（tongue twister）</h/>

- 日本語とは発音の方法が異なる音を聞き分け、発音する
- 音の分離を理解する（Hi-lla-ry）
- 手拍子を取りながら、英語のリズムで歌う

12．Three Little Ducks（song）</k/ /m/ /n/>

- 日本語に近い音はあるが、もっと強い摩擦音を聞き分け、発音する
- 音の結合を理解する（/d/-/u/-/k/. What's the word? Duck.）
- 動物の英語の鳴き声を知り、発音する

13．Phonics Alphabets（song）<phonics>

- アルファベット24文字の名前と音を聞き分け、発音する

4.3. CD 教材案

上記13作品の中から、"Ten Fat Sausages" を例にとって、CD 教材のサンプルを紹介する。CD 教材の中身については、選曲した作品にナレーションを加えて、小学校教員達が CD を聞きながら、英語の音に慣れ親しみ、phonemic awareness を育成できるようなものを検討中である。CD の録音時間の関係から、全ての内容を音声化することはできない場合は、CD 解説書を併せて作成し、補足する予定である。以下のサンプル例は、CD 教材の録音用台本という形で提示する（□内の数字は、トラック番号を表す）。

1

この CD は、小学校の英語教育指導者の先生方のために作成した、自己研修教材です。CD には、14の歌やチャンツ、早口言葉が録音されています。練習用に替え歌を作ったものについては、オリジナル曲と替え歌の両方を録音しました。

それぞれの曲のねらいと練習方法など、詳しい内容については、解説書を参照してください。解説書では、教室で実際に使えるように、収録曲を利用したアクティビティも紹介しています。収録の順番はとくに気にせず、必要に応じて、CD で好きなところを練習した後で、ぜひ、教室で実践してみてください。

1曲目は、練習方法や利用できるアクティビティ案だけでなく、利用者が参加しながら練習できるような内容になっています。ナレーターの指示に従って、一緒に声を出して歌詞の練習をしたり、振りを付けたり、手をたたきながら歌ったりしてください。

では、1曲目の "Ten Fat Sausages" を聴いてみましょう。

2

Ten Fat Sausages
Ten fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went bang
Eight fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went bang
Six fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went bang
Four fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went bang
Two fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went bang
No more sausages

3

いかがでしたか。弾むようなリズムでしたね。これはチャンツという「メロディーのない歌」です。チャンツは、最も話し言葉に似ていて、この言葉のリズムそのものを表しています。チャンツは長い年月の間、伝承されてきたもので、歌詞、リズムの取り方など、色々なバリエーションがあります。歌詞を替えたりしながら、自由に楽しむこともできます。

では、次に歌詞の練習をしましょう。ネイティブ・スピーカーに続いて、繰り返してください。ま

ずはタイトルからです。

4

N： Narrator
T： Teacher

N：テン（手を２回たたきながら）じゃなくて、ten（手を１回たたきながら）
T：（リピートする時間をとる）
N：ファット（手を２回たたきながら）じゃなくて、fat（手を１回たたきながら）
T：（リピートする時間をとる）
N：ソーセージ（手を５回たたきながら）じゃなくて、sausage（手を２回たたきながら）

いかがでしたか。リズムの取り方が日本語での取り方と違うことが分かりましたか。日本語はモーラ型言語、英語は、強弱のリズムがはっきりとしている強勢型言語といいます。

では、歌詞を一行ずつ、ネイティブ・スピーカーに続いて繰り返しましょう。

5

NS：Native Speaker

NS：Ten fat sausages sitting in the pan
T：（リピートする時間をとる）
NS：One went pop and other went bang
T：（リピートする時間をとる）
NS：Eight fat sausages sitting in the pan
T：（リピートする時間をとる）
NS：One went pop and other went bang
T：（リピートする時間をとる）
NS：Six fat sausages sitting in the pan
T：（リピートする時間をとる）
NS：One went pop and other went bang
T：（リピートする時間をとる）
NS：Four fat sausages sitting in the pan
T：（リピートする時間をとる）
NS：One went pop and other went bang
T：（リピートする時間をとる）
NS：Two fat sausages sitting in the pan
T：（リピートする時間をとる）
NS：One went pop and other went bang
T：（リピートする時間をとる）
NS：No more sausages

6

今度は、リズムに合わせて手拍子を取りながら、歌ってみましょう。CDをトラック1に戻してください。

7

教室で低学年の子どもたちと歌う場合は、手拍子の後は、ジャンプをする、手で膝や机をたたく、足を軽く踏みならすなどで、リズムを取りながら、何度か練習をするといいでしょう。

8

このチャンツの意味は、
「10本のふといソーセージがフライパンの中
１本がポーンと飛び出し、もう１本がバーンと飛び出し
８本のふといソーセージがフライパンの中
１本がポーンと飛び出し、もう１本がバーンと飛び出し…
と、２本ずつ少なくなっていって、最後は、なくなっちゃった」というものです。

9

次は、意味を考えながら、皆さんがソーセージになって、振りを付けてみましょう。例えば、

1．Ten fat sausages のところでは、両手を広げて10の数を表現してから、両腕を大きく広げてfat を表し、両手でソーセージの形を作ります。
2．sitting in the pan のところでは、座って両手で大きな輪を作ります。
3．One went pop のところでは、手を下から上へ元気よく一回たたきながら“pop”と言っていきおいよく立ち上がります。
4．and other went ban のところでは、手を上から下へ思いっきりおろしながら一回たたきながら“bang”と言います。
5．No more sausages のところでは、手を広げてちょっと肩をすくめるジェスチャーをしてみましょう。これは、欧米の人たちが「どうしようもない」とか、「困ったね」等と言うときにす

る仕草です。

それでは、振りを付けながら歌ってみましょう。CDをトラック1に戻してください。

10

いかがでしたか。振り付けをしながら歌えましたか。振り付けは自由に考えてみましょう。中学年や高学年のクラスでは、fatのところをlittleやlongなど、子ども達が知っている単語を使って復習することもできます。子ども達に単語の入れ替えと振り付けを考えさせて、グループ毎に発表させると、楽しい活動に発展できます。

今度は、もう一度、音に集中してみましょう。歌は歌わずに、panという音を聞いたら、手拍子をしましょう。

Ten fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went bang
Eight fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went bang
Six fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went bang
Four fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went bang
Two fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went bang
No more sausages

11

次は、bangの音を聴いたら、両手で机をたたきましょう。

Ten fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went bang
Eight fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went bang
Six fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went bang
Four fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went bang
Two fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went bang
No more sausages

12

日本語のパン、バンと英語のpan、bangの最初の音は違っていますね。違いが聞こえましたか。panの最初の音は/p/、bangの最初の音は/b/です。/p/の音も、/b/の音も、唇をしっかり閉じて口の中に空気を溜めて、口をぱっと勢いよく開いて出します。日本語の音より、ずっと強い音になります。ちょっと、その違いをチェックしてみましょう。ティッシュ・ペーパーを用意してください。その下端を指で持ち、口との距離が10センチくらいの位置に紙の上の端が来るようにして、日本語で「ぱぴぷぺぽ」と発音しましょう。ティッシュ・ペーパーは揺れませんね。

では、今度は、唇をしっかり閉じて口をぱっと開けて英語で、pa pi pu pe poと発音してみましょう。強い音で、空気がぱっ、ぱっ、ぱっ、と出るので、ティッシュ・ペーパーの端が発音するたびに揺れます。いかがですか。できましたか。

歌う前に、今度は、pとbの違いを確認してみましょう。どちらの音も、口を閉じて、口をぱっと開いて発音しますね。

次に、片手を広げて人差し指、中指、薬指の指先を喉仏に当ててみてください。ｐｐｐｐｐｐと言ってみましょう。今度は、ｂｂｂｂｂｂと言ってみましょう。どうですか？　そうです、/b/の時には、喉が震えていますが、/p/の時には指先に振動が伝わってきませんね。これが、/p/と/b/の音の違いなのです。

それでは、/p/と/ｂ/の両方の音に集中しながら、歌ってみましょう。/ｐ/の音のところで、歌いながら手をたたきます、/ｂ/の音の所では、机をたたきましょう。

Ten fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went bang
Eight fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went bang
Six fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went bang
Four fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went bang
Two fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went bang
No more sausages

13

最後にもう一度、音を確認してみましょう。私が発音しますので、皆さんも続いて繰り返してくださいね。

パンパパパンじゃなくて pan pa pa pan
(聞き手がリピート)

バンバババンじゃなくて bang baba bang
(聞き手がリピート)

ポップポップポップじゃなくて pop pop pop
(聞き手がリピート)

今度は、私が日本語で言いますので、皆さんは英語で言ってみてください。

パンパンパンパパパンじゃなくて、＿＿＿＿＿＿＿＿

バンババンバババンじゃなくて、＿＿＿＿＿＿＿＿

では、次に、bang を pang に替えて歌ってみましょう。

Ten fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went **p**ang
Eight fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went **p**ang
Six fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went **p**ang
Four fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went **p**ang
Two fat sausages sitting in the pan
One went pop and other went **p**ang
No more sausages

ソーセージのはじけ方が違いますね。

5．今後の課題と展望

インターネットやグローバリズムの台頭の中、各国の経済力の躍進を背景に、アジア諸国（地域）でも国際語としての英語の必要性に注目し、早期英語教育導入の傾向が顕著である。日本と同様に、英語を外国語として学ぶ韓国や台湾では、すでに小学校段階から正式科目として英語が導入されている。例えば、2007年３月に筆者らが訪問した台湾においても（注４）、台湾および台北市の教育省による初等英語のガイドラインが明文化されており、小中一貫９年間で小学校段階から４技能によるコミュニケーション能力の育成（使える英語）を目指している。さらに、授業見学を行った小学１年生のクラスにおいては、phonemic awareness を基本とする内容が盛り込まれ、音をよく聞かせる活動を中心に、適宜グループ間で競争させながら、ゲームやアクティビティを取り入れていた。指導者については、同一シラバスのもと、１年生全３クラスをそれぞれ英語専科教員１人、担任教員２人が子ども達と楽しく、教室中を駆け回りながら、授業を行っていたのが印象的であった。さらに、小学６年生クラスでは、phonemic awareness を基本に、phonics に発展させながら、スピーキング活動、リーディング活動、ライティング活動を行っていた。

日本においては、現行の小学校英語活動は、文字と切り離した形による音声中心の指導が基本となっている。しかし、英語の「習得」と「定着」を目指し、４技能（スピーキング、リスニング、リーディング、ライティング）育成に発展させるためには、十分な音声活動に加え、小学校においても適切な内容と方法で文字指導も段階的に入れていくことが不可欠であろう。筆者らはこのような考えのもと、「リーディングによる読解力重視のカリキュラムは、音声重視のみよりも英語保持能力を高め、長期的展望に基づく英語教育の重要な基礎となる」という仮説を立て、小学校英語カリキュラム開発研究を続けてきたが（金澤・伊東、2007；ほか）、台湾のように、音声活動（リスニング、スピーキング）を土台にした文字による活動（リーディング、ライティング）への段階的・発展的な指導方法を考えなければならない。

アルファベット言語である英語を理解するために単語を構成する音の組み合わせを知ること、発話させる単語が音節と音素のつながりであることに気づかせること、つまり、日本ではまだ新しい概念である phonemic awareness 育成が英語の単語や文を分析的に理解する上で重要な役割を担っており、これが小学校英語と中学校の英語学習が連携するための鍵であると言えるであろう。

本論では、小学校英語を中心となって教えている小学校教員の不安や負担を取り除き、「英語教授力」の育成を図るということの重要性と必要性を踏まえ、小学校教員の自己研修用音声教材開発研究について述べてきた。今後は、本年度中に現在制作中の phonemic awareness 育成のための「小学校教員の自己研修用 CD 教材」を完成させ、本調査のアンケート協力校および協力者達に無料提供し、実際に使

用してもらうことを計画している。その後、この試作CD教材に関するアンケート調査を行い、現場の声を活かした小学校教員のための教材開発研究をさらに続けていく予定である。

注1）本調査は、平成18～19年度科学研究費補助金（基盤研究（C）／課題番号 18520472／駒沢女子短期大学　研究代表者・金澤延美）の一部として行った。

注2）英国の英語プログラムの指針はThe National Curriculumに準じたThe National Literacy Strategy（The NLS）（ナショナル・リテラシー・ストラテジー）に書かれている。

注3）以前は、モーラ型言語を音節型言語の下位範疇とする分類が多かった。音節型言語においては、各音節がほぼ等しい長さを持って発話される。フランス語、スペイン語が代表的な言語。

注4）本視察調査は、平成16～17年度科学研究費補助金（基盤研究（C）／課題番号16520368／駒沢女子短期大学　研究代表者・金澤延美）の一部として行った。

引用・参考文献

1）Adams, M.J. et al. (2002). *Open Court Reading : Level 1 -Unit 1 Let's Read! (Teacher's Edition).* Columbus, Ohio : SRA/McGraw-Hill.

2）Benesse教育研究開発センター（2007）。『第1回小学校英語に関する基本調査【教員調査】報告書』、東京：Benesse教育研究開発センター。

3）Department for Education and Employment (1998). *The National Literacy Strategy : Framework for teaching.* London : Department for Education and Employment.

4）Department for Education and Employment (2000). *The National Literacy Strategy : Phonics (with CD ROM).* London : Department for Education and Employment.

5）Fitzpatrick, J. (1997). Phonemic Awareness : *Playing with Sounds to Strengthen Beginning Reading Skills.* Cypress, CA : Creative Teaching Press, Inc.

6）伊東弥香（2005）。「第9章　発音指導」、JACET 教育問題研究会（編）『新英語科教育の基礎と実践―授業力のさらなる向上を目指して』、pp. 82-91、東京：三修社。

7）伊東弥香・金澤延美（2006）。「小・中連携を視野に入れた文字指導―phonemic awareness育成を目指すアクティビティ案―」『小学校英語教育学会紀要　第6号』、小学校英語教育学会、pp. 29-31。

8）伊東弥香・金澤延美（2007）。「小学校英語の指導者に求められる資質と必要とされる指導者研修―公立小学校教員の『英語活動』に関する意識調査―」、『小学校英語教育学会紀要　第7号』、小学校英語教育学会、pp. 1-6。

9）金澤延美・伊東弥香（2006）。『一貫性教育に位置づけるための小学校英語：英語習得と保持能力向上の調査研究』（平成16～17年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書研究課題番号16520368／駒沢女子短期大学　代表・金澤延美）。

10）金澤延美・伊東弥香（2007）。「韓国の初等英語に関する調査―日本の小学校英語カリキュラム開発への示唆を探る―」、『研究紀要　第40号』、駒沢女子短期大学、pp. 9-25。

11）金澤延美・伊東弥香（2008）。「『英語活動』に関する公立小学校教員の意識調査―小学校英語の指導者の資質と指導者研修について―」、『小学校英語教育学会紀要　第8号』、小学校英語教育学会（採択済み）。

12）小池生夫（編）（2003）。「応用言語学事典」、東京：研究社。

13）文部科学省（2001）。「小学校英語活動実践の手引き」（東京：開隆堂）。